

顕浄土真実行文類二(十一)

高田短期大学名誉教授 栗原廣海

一、行の一念

光明と名号の因縁の釈では、「真実信心の念仏」こそが浄土往生の正因であることが明らかにされています。続いて、次のように御自釈されています。

おおよそ往相回向の行信について、行にすなわち一念あり、また信に一念あり。行の一念というは、謂わく称名の遍数について、選択易行の至極を顕開す。

(そもそも、往相回向の行信に関して、行にも一念ということが説かれて、信にも一念ということが説かれている。行の一念というのは、最初の一声という、もつとも少ない称名において、阿弥陀仏が選り取られた易行の、称名

ん。なぜかと言えば、行というのは、本願に誓われている名号を一声称えて往生できるのであるという教えを聞いて、一声の称名をする、あるいは十声の称名をすることです。このお誓いを、すこしの疑う心もなく聞き、受け入れるのを信の一念というのです。信と行と言えぱたしかに二つですけれども、一声の行(称名)でお救いいただくという疑われないのが信ですから、行を離れた信というものはないのであると聞いています。また、信を離れた行もないのだと心得てください。行と信というのは、弥陀のお誓いなのです。

「行」と「信」とは別の言葉ですし、その概念も私たちにとっては同じものではありません。しかし、弥陀の本願は、『なもあみだぶつ』を信じ称えるものを必ず救う」と誓われているのであり、その信は大信として、行は大行として、阿弥陀如来から回向されているのです。信じるのは私であり、称えるのは私ですが、その信と行の内実は、弥陀の悲願のみ心そのもの、仏徳に満ちた弥

に込められている究極の意義をあらわすのである)

「行文類二」の最初には、「謹んで往相の回向を按ずるに、大行あり大信あり」と言われていました。この言葉に対応して、ここでは大行について一念ということが説かれ、大信についても一念ということが説かれていると言われ、大行について論じているこの章では、「行の一念」が明らかにされています。

「行の一念というは、謂わく称名の遍数について、選択易行の至極を顕開す」というのは、難しい言葉ですが、建長八年(一二五六)、聖人が八十四歳のときに、高田の覚信房に返信された「御消息」のなかで、「行の一念、信の一念」について、説明しておられますので、現代語にしようかと思ってみたいと思います。

「信の一念、行の一念と言えぱ二つですが、信心から離れた行、つまり念仏はありませんし、行の一念を離れた信の一念というものもありません

陀のおはたらきそのものなわけです。

念仏が自力の行であるならば、念仏は一声よりも十声、十声よりも百声、千声、万声と、称える回数が多い方がより多くの功德を積むことになり、往生の可能性も増すこととなります。私たちのものさしで回数や時間などを問題にし、目的達成の可否を云々するのが自力の世界です。

それに対して、「御消息」に「行というのは、本願に誓われている名号を一声称えて往生できるのであるという教えを聞いて、一声の称名をする、あるいは十声の称名をする」と言われるのは、称名という行は、弥陀回向の大行であるから、本来、回数を取り沙汰する私たちのものさしを超えていて、数字にあらわすことはできないものであるけれども、私たちがとらえやすいようにあえて数字であらわすならば、「一念」つまり「一声」ということに極まるのだということが示されているのであると理解できるでしょう。そしてこのことが御自釈に「行の一念というは、謂わく称名の遍数

について、選択易行の至極を顕開す」と示されているのであると言えるでしょう。

二、行の一念を説く『無量寿経』の文

行の一念について述べた御自釈に続いて、『無量寿経』の、いわゆる「弥勒付属の文」が引文されます。

ゆえに『大本』に言わく、「仏、弥勒に語りたまわく、「それかの仏の名号を聞くことを得て、歡喜踊躍して乃至一念せんことあらん。まさに知るべし、この人は大利を得とす。すなわちこれ無上の功德を具足するなり」と。已上

(だから『無量寿経』に次のように説かれている。「釈尊が弥勒菩薩に仰せになる。『もし、阿弥陀仏の名号のいわれを聞いて信じ喜び、わずか一声念仏すれば、この人は大きな利益を得ると知るがよい。すなわちこの上ない功德を身にそなえるのである』」)直前の「行の一念」についての解釈の根拠を『無

量寿経』によって示されています。また、聖人はこの大切な文の内容を、『浄土和讃』「讃阿弥陀仏偈和讃」第二十八首に、

阿弥陀仏のみなをきき

歡喜贊仰せしむれば

かんき さん こう
よろこび よろこぶ ほめ あおぐ
歡は身をよるこぼしむるをいうなり
喜は心をよるこぼしむるをいうなり

功德の宝を具足して

一念狀利無上なり

いちねんだいりむじょう
涅槃にいるを大利というなり

(阿弥陀仏の名号を聞いて、身も心も喜びに満ちて弥陀を讃嘆申し上げると、名号の無量の徳が身にそなわつて、一声の念仏で涅槃をさとするというこの上ない大きな利益を得るのである)とうたわれています。

三、「乃至」の意味

『無量寿経』「弥勒付属の文」の引文に続き、善導大師の「下至一念」(『観経疏』)、「一声一念」(『往生礼讃』)、「專信專念」(『観経疏』)の言葉

を引用されたあと、智昇の『集諸経礼懺儀』の文を引文し、これらに基づいて御自釈にもどられます。

『経』に「乃至」といい、釈に「下至」とい

えり。乃至その言は異なりといえども、その意これ一なり。また乃至とは一多包容の言なり。

(『無量寿経』には「乃至」と説かれ、善導大師の『観経疏』には「下至」と説かれている。乃至と下至とは、言葉は異なるけれども意味は同じである。また乃至とは、一念の意味も多念の意味も、両者を合わせもった言葉である)

『無量寿経』の「弥勒付属の文」には、「歡喜踊躍して乃至一念せんことあらん」と「乃至一念」が説かれています。また、善導大師の『観経疏』「散善義」には、聖人はここでは引文しておられませんが、「上尽一形、下至一念等(上一形を尽くし、下一念等に至る)」と「下至一念」が説か

れています。「乃至一念」と「下至一念」、「乃至」は同じであると言われるのです。

この「乃至」について『尊号真像銘文』には、第十八願文に説かれる「乃至十念」を釈して、『乃至十念』というのは、阿弥陀仏が本願に誓われた名号を称えることをお勧めになるにあたり、念仏の数が定まっていなことをあらわし、また念仏する時を定めなことをすべてのものに知らせようとお思いになり、『乃至』の言葉を『十念』の名号、すなわち十回の念仏に添えてお誓いになったのである」と言われています。

ここには、「乃至」とは、称名の回数や称える時間の長短を問題としないことをあらわす言葉であることが示されています。それが「乃至とは一多包容の言なり」の意味するところです。回数や時間を問題にすれば、その行は本願他力の行であることを離れ、たちまち自力の行になってしまうのです。